

心で読むカント哲学

karinomaki

はじめに

私は人生が苦であるということを前提に生きている悲しい人間ですが、哲学者のカントの著書を読み、その苦をこれほど美しく燃焼させて書いている本にであったことがないと思いました。それが私の哲学との出会いでした。私は人生につきまとう苦やわだかまった気持ちを哲学の理論で分解するという方法を知ったのです。

難解といわれるカントの哲学を全て理解する力のない私ですが、私は難解な本のアウトラインをつかみ、ある程度自分に適合する、自分の人生の指針にできる箇所をひろい読むという、すこしづるい、本の読み方を知っていました。この文章はカント哲学を研究対象にされている方々の書かれたものには到底およばぬものと思うのですが、わたしがカント哲学に生きる力をもらったことを書き記したいという強い欲求に動かされて書きました。

カントの純粋理性批判において大きくとりあげられているのは認識についてです。大きくいえば自然認識といえると思います。この著書においてカントは理性による認識の限界をこえて神の世界にまでのぼろうとすると「アンチノミー」という大きな矛盾が生じてしまうと書いています。しかし人は本当に苦しいとき、神や彼岸の世界のことを考えるものです。私もそうです。カントは決して神の世界を批判したのではなく、理性の限界をしっかりとみずえることで、美しい彼岸の世界へのあしがかりつくろうとしたのではないかと私は思いました。そのとき苦しみの中に沈み、疑心暗鬼になっていた私は、ひとすじの強い光を見ました。そしてカントはもうひとつ大切な矛盾を書いていました。認識論である純粋理性批判の次に彼が書いたのは実践理性批判という道徳書です。自然の中の欲求という認識の基軸からぬけでて道徳的な意志を人がもつのははばむ、「躓きの石」があるということです。確かに欲望のままに生きていれば決して道徳的にはなれません。そうかそれで人は苦しいのだと私は思いました。それが私が哲学を素晴らしいと思ったきっかけでした。

いつか苦しみをぬけて幸せの世界に行きたい・・・カントはそんな人間の願望を見すえながら、決してそれが、ふわふわしたものに乗る幸せではなく、しっかりした軸のうえに乗ってこそ得られるものであると・・・そう考えて理性を厳しく批判するという哲学を展開したのではないかと私は思いました。

カントは純粋理性批判で認識論を展開しています。私は、この認識論こそが、カントがのちに実践理性批判で書くことになる、道徳の国「目的の国」を支える大きな柱だと思います。純粋理性批判と実践理性批判をてらしあわせてみると、実践理性批判でくりかえし書かれている「自由な道徳的意志」が成立する以前に、さけてとおれないものがあります。それをカントは純粋理性批判で柱として書いているように思います。人は自然を認識するとき、必ず心の中に、感情をもちます。カントはその感情を「感性」として、認識がはじまるためのものとして書いています。その「感性」が、人間がさまざまな思考を展開する出発点であり、全ての基軸です。しかし、認識だけにたよって心に感じたままを実行しつづけることは道徳と大きくくいちがいます。道徳心のめばえていない子供時代は、すべての人がこの状態に支配されています。この認識による「自然的欲求」が、純粋理性批判の「認識論」の基軸と考えると、カントが次にそれを克服するべく実践理性批判を書いた意味がつかめるのです。子供が自然的欲求を道徳的に克服していても、人間はそれで幸せな道徳の国に行くことはできません。

物事を認識し、対処しつづける限り、人は心のままに生きたいという自然的欲求と、そうしてはいけない、道徳的に生きるには我慢しなければならないという葛藤の中にいます。しかしまちががなく、認識するからこそ人は道徳の実践に向かえるのであり、実践理性は純粋理性の上に立脚するのです。しかしそれはたえずぶつかりあい、カントはこのふたつのぶつかりのあいだに「躓きの石」があると、表現しました。（躓きの石はカント哲学では「自由」を指します。）

私は、哲学に限らずすべての分野は苦しみを浄化することができ、また苦しみを軸にして成立するときこそ人はその道をきわめているといえるような気がします。苦しいときにこそ哲学をしたいという思いがわくと思うのです。カントの哲学を知った時、私は「躓きの石」という哲学の十字架があるからこそ、また人の人生において苦しみがあるからこそ、それをなんとかして克服したいという意欲がわき、カントもそうだったのではないかと思いました。純粋理性という苦しい軸のうえにこそ、道徳哲学「実践理性批判」が成立し、そこへいくのをはばむ躓きの石は苦しみではありますが、哲学の要だと思ったのです。

躓きの石をダイヤモンドにかえたい

しかし私は人生の苦しみから逃げるかのように、繰り返し試行錯誤していました。そのときやはり、幸せな世界に行くには・・・道徳的な自由の世界に行くためには躓きの石がどうしても邪魔でした。躓きの石という「自由」は、自由の持つ重い側面と言えるのです。欲求のままに生きたいという、人の自然意志は、道徳的な生き方をしなければならないという実践理性の原理にはばまれます。そして、この痛い石をなんとかダイヤモンド変えられないかと思いました。そしてその葛藤の中で悩むのがいやになった私は実際にダイヤモンドを買えば何かが変わるのではないかとさえ思いました。自分は一生懸命哲学をしても決して問題は解決しない・・・そんな日々がいやになっていました。スポーツ選手が金メダルがほしいと思うように、私は自分が頑張っていることを何かでねぎらいたかったのかもかもしれません。しかし私は思いました。躓きの石に向き合い続けて、ダイヤモンドに変えたい、でもできないことは、錬金術で賢者の石をつかって金を作り出そうとして、結局作れなかったことと同じだと。それは「カントはこう考えた」という本で読んだ知識です。中世ヨーロッパにおいて流行した「錬金術」において、金を作り出す素である「賢者の石」というものがあると信じられていたそうです。この「賢者の石」は、ラテン語を直訳すれば「哲学者の石」というそうなのです。人は生きている限り心の中に痛い石(躓きの石)を持っているようなもので、その石はなくならない。錬金術で金を作れなかったように、躓きの石でダイヤモンドをつくることはできないでしょう。錬金術で金をつくることができなかったように。しかし、錬金術で金ができなかったことによってその作業が無駄になったわけではないのです。なぜなら錬金術が、今日の「化学」を生み出したのです。苦しみの石は、人生においてひとつの道をいくのに不可欠なのです。常に何かを生み出していくもとになっているのです。そのことを知った私はその石から逃げるような姿勢をやめ、向き合うことに決めました。

躓きの石をダイヤのように光らせる「ア・プリアリな総合判断」

カントの哲学用語で「ア・プリアリな総合判断」という言葉があります。「ア・プリアリな総合判断はどうして可能なのか」という問いはまさにカントが純粋理性批判で解こうとしたもっとも大きな課題といえるでしょう。これを私は、純粋理性と実践理性がぶつかりあう交点に位置する躓きの石が、ダイヤモンドにかわってをはるか上の神の世界を照らし出すのは可能か・・・という意味に考えたのです。「T」の字を思い浮かべて下さい。縦の線が純粋理性の自然認識、横の線が実践理性の道徳的自由です。その交点に躓きの石があります。もちろん横の線に乗る方が人は幸せです。自然的欲求にふりまわされずに道徳的自由を実現できれば、カントの言った「目的の国」という道徳の国の住人になれるでしょう。ここにいくには躓きの石が邪魔です。しかしカントがこの石を邪魔だとせずに批判哲学の基軸と考えていたことは、カントの著書から伝わってきます。カントが解こうとした「ア・プリアリな総合判断」も、この石を軸にした思考だと思われるのです。

「ア・プリアリ」とは、「経験より先だった」という意味であり、「総合判断」とは、「主語に含まれない事象の認識」という意味ですが、これは神のわざを自分の認識に取り込んでしまうというイメージでとらえて下さい。人は絶対的真理を、経験の枠をこえて頭の中に先取りしてしまうことが可能なのです。たとえば物理学で、到底解くことのできない、自然現象を明解な公式で解くことのできたとき、自分を天才だと思い、同時に不思議な気持ちがしませんか？どうして経験もしていない現象を、ただ紙で計算するだけで解けるのかと・・・。それが「ア・プリアリな総合判断」なのです。これがなぜ可能なのかをカントは純粋理性批判で認識の原理を解くことで説明しています。これはたいへん難しく、今の私には解説できないので別の視点から見てみます。世界をカントは二つに分けて考えています。純粋理性の感性界と、実践理性の叡智(えいち)界と大まかにとらえて下さい。実践理性の世界まで手をのばすのが「ア・プリアリな総合判断」です。ここに手をのばすには、躓きの石の上に立つしかないのではないのでしょうか。カントは「批判」という哲学の支点を躓きの石とし、痛みのうえに道徳的自由の国が広がると考えたからこそ、この石の上に乗れば「ア・プリアリな総合判断」を行うという、叡智界を眺める神業が成されると考えていたと、私は解釈したいのです。ア・プリアリな総合判断は、たくさん勉強して公式をわりだそうとする努力、また、現実世界の中で苦しみとむきあって昇華させて神の光を感じる、努力の苦しみの上に成り立つ全ては苦である躓きの石が原点です。だからこそカントは大切な著書に「批判」という苦を含む名前をつけたのではないかと思うのです。この努力の上にならば、躓きの石を、はるか上方を照らし出すダイヤモンドにかえる魔法が成り立つはずですが、生きるということは、重い荷物をせおうことです。カントも躓きの石を哲学の十字架としてせおうっていたのでしょう。しかしこの石をめぐる人生の戦いこそ真に尊い自由をえるためのものです。この石から逃げては何も築きあげることはできません。カントは「批判哲学」としてこの石を批判しながら、誰も見ることのできないかと思われる神の叡智界を見わたそうとしたのです。本当に美しい世界は、厳しい批判のうえに成り立つという、カントの強さを、その著書から読み取ることが出来ます。

躓きの石をダイヤのように光らせる「ア・プリオリな総合判断」2

形而上学は今もそうですが、カントの時代にも力を失っていました。理性を信じすぎる独断論と、その反対の立場の懐疑論の間で哲学はゆれていました。この問題に正しい答えを出すために、カントは認識論において、躓きの石を守りながら同時に否定することを支点にして、哲学の二つの立場を調停するという方法をとったのです。私はカントの哲学にふれて、苦しみが、哲学に必要なものとして認められた上で、そこからア・プリオリな総合判断として、神の叡智界への思考を展開する要となるという、魔法のような現象を見たのです。ア・プリオリな総合判断を可能にすることは、哲学が成立することを可能にするために不可欠なことです。経験に先立つ認識を可能にしなければ神や自由、靈魂の不死について語ることはできません。それを語るには、人間の理性を信じすぎても妄信的になり、疑いすぎると否定的です。この二つを調停するという立場で、カントは純粋理性批判で認識論を展開したのです。

ア・プリアリな総合判断のイメージ

自分にとって何が大切かということに苦しいときに考えて、答えが出たとき、その答えは強い支えになります。カントの哲学を読んで私は思いました。苦しいときのもっとも強い支えは、苦しみからののがれるような支えではなく、苦しみを包み込む、やわらげるものだ。ア・プリアリな総合判断は、批判哲学という苦の上でこそ成り立つ。しかしその苦しみを包み込むことで、苦はつぼみとなり、いつしか花開きます。苦しみにむきあうことの大きな意味をつかんだ私は、次に読んだカントの判断力批判で、その苦しみが大きく花ひらくような奇跡を見ました。

カントは三つ目の批判書「判断力批判」で芸術と自然について書いています。カントの批判哲学は判断力批判で完成とされています。なぜ批判哲学の完成にカントが芸術と自然を選んだのか解明したいと思います。カントはもしかしたら純粋理性批判と実践理性批判で哲学を完成させるつもりだったのかもしれませんが。しかしどうしても判断力批判が必要と思っておいたようにおもわれます。なぜでしょうか？純粋理性の認識論はまっすぐ自然界に伸び、躓きの石の苦しみにぶつかり、その苦しみの上に実践理性の道徳論が成り立ちます。その道徳はとても美しいものであり、躓きの石を克服してそこにのればそれが永遠の楽園、カントの言う目的の国のはずです。カントは実践理性批判の結びにこのようにしています。「ここに二つの物がある、それは

我々がその物を思念すること長くかつしばしばなるにつれて、常にいや増す新たな感嘆と畏敬の念とをもって我々の心を余すところなく充足する、すなわち私の上なる星をちりばめた空と私のうちなる道徳的法則である」この言葉に私は、心の苦しみをこえて星空にまで手をのばした感覚を表した言葉のように思いました。しかし、星空へのアプローチははてしないものです。本当に道徳だけがそのアプローチを可能にするものか・・・そんな疑問がわいてくるのではないのでしょうか。カントの道徳哲学は厳しさもあります。書く作業も苦しかったかもしれません。そんなときにカントは何か美しいものにふれて感動する気持ちに気がついたのではないかと思われるのです。勝手なことですが、そんな感覚を詩で再現してみたくなりました。

私は哲学で空に橋をかけようとした

そして地道に建築物をつくっていた

苦しみの岩をこえて、痛みの中その仕事を続けていた

私の目標はあの空の星であり、心の痛みと向き合い積み重ねることで、その心は次第に星と同化していった

そんなとき、ある一人の芸術家の生き方にふれた

彼は建物をたてず、流浪の暮らしの中、美しい絵を何枚も描いていた

星空の絵もたくさん描いていた

彼の目はかがやき、私にはまるで彼に星が降り注いでいるかのように見えた

彼は、積み上げて星にちかづこうとする私よりも星に近いのかもしれない

私の建物は確かに星に近いのだけれど、それにのっけていて心の苦しみにから本当にのがれたことがあったらどうか

なにも建てていない彼のほうが、私より高いところにいるように思えてならない
芸術とはどういうものなのだろうか

ア・プリアリな総合判断のイメージ2

カントは、純粹理性批判の自然認識がまっすぐ上へ伸び、横へ伸びる実践理性批判の道德哲学と、躓きの石でぶつかるというイメージをもっていただと私は考えます。そしてその躓きの石をこえようとしてしか、ア・プリアリな総合判断という、神の世界に手をのばすかのような認識はできないと考えたというのが、私のもっているカント哲学のイメージです。それでは三つ目の批判書の題材となっている「芸術・自然」とはどこに広がるのかを考えてみたいと思います。カントは芸術における天才を真の天才と考え、なぜ芸術家は神のつくった自然美にふれたときに匹敵するほどの、心の感動を生み出す芸術を作り出せるのかを書くために、美学的判断について分析しています。カントが言うには、美学的判断とは、心の関心を超越したものなのです。それは、おそらく純粹理性の縦のラインも、実践理性の横のラインも、完全に越えてしまった認識なのでしょう。人間は芸術や自然の美にふれたとき、その中に神の秩序を見ます。そのとき人は感動します。そのときにはたらいっているのが「快・不快の感情」であり、判断力とカントは名づけています。その感情は純粹理性や実践理性のように、苦しみの地に足をつけた感情でしょうか？心から感動するとき、人は神の精神にまで心がはばたいていてのではないのでしょうか。だからカントは美学的判断を、心の関心を超越しているものと表現したと思われまます。芸術家がなぜ真の天才なのか・・・それは神しかもっていないはずの秩序を、純粹理性や実践理性のラインを土台にすることを必要とせず、はばたいて行って手の中につかみとり、作品の中に表してしまうからです。だからカントは学問という土台からの建物から星をつかむよりもっとすごい方法を芸術家がもっていると考えたのではないのでしょうか。それはまるでア・プリアリな総合判断の花が、痛みの根や幹をこえて、天上で花ひらいたかのような魔法です。カントは芸術家がうらやましかったのかもしれない。

私たちはどんなに真面目に生きていても、ときとして足もとをすくわれそうな苦しみに出会います。そんなときに、今まで自分がつみあげてきたものは何だったのだろうとってしまうこともあります。カントの純粹理性批判は十年もの年月をかけて完成したにもかかわらず、世間はこの著書にたいして無理解でした。カントはそのとき、自分がしてきたことは何だったのだろうと落胆したかもしれません。しかし、心が沈んだときには必ず自分の足もとを再びかためて、さらに上昇させてくれる命綱が見つかるものです。カントは自分の苦しみの土台を見つめながら純粹理性批判を書きました。そして彼の苦しみは次の実践理性批判を書くエネルギーに向かったのです。

苦しみの土台からの飛躍

人は苦しみの意味を考え、その苦しみが自分におとずれた理由をさとった時に、自分でも驚くような飛躍をとげます。その苦しみとは、やはり躓きの石といえるでしょう。自然的欲求と道徳的意志のぶつかりあいをごえるには、苦しみを大切なものと考えることが重要となります。そして、苦しみの石をごえるときに、もうひとつ重要なことがあります。それは何か感動することです。自分の苦しみは、何か神の啓示であるかのようなものにふれたとき、その力によって、不思議なほどきれいに浄化されるのです。それは苦しみの沼の中からそびえる美しい木に咲く花を見つけ、沼の中にそびえるからこそ、木が美しい花を咲かせることに気づくことに似ています。この木をもとに、カントの三つの批判書の位置づけを試みたいと思います。

この木は、縦が純粋理性批判で横が実践理性批判である、Tの字の交点の、躓きの石から伸びるのです。どろどろの沼にふたをしてきれいなものを上につくるよりも、沼の中で苦しんだのちにその沼から美しい木を生やすほうがずっと美しくしっかりした木が育つと思われませんか？苦しみの源である躓きの石の下はどろどろの沼です。純粋理性批判の自然的欲求から実践理性批判の道徳的な生き方にうつれない苦しみこそ人がかかえていく最も大きな苦しみの源です。もし自分の心の中の沼を全く見ようとせず、これにふたをして生きていくと、木を植えることなど決してできません。自分は素晴らしいと思いきや、それは最も向上をさまたげる考えなのです。自分はとてもちっぽけな、大きな自然の中の一部であると思ってこそ大地にしっかり根をはる木として自然の中で生きていけるのではないのでしょうか。そのために、苦しみの沼をしっかりと見つめることは絶対に必要であり、木を植えるためにこそ苦しみがおとずれるのです。

カントは純粋理性批判が世の中で理解されなかったため、その第二版を出版しています。そのあと次の実践理性批判にむかいました。足もとをかためてから次へむかったといえるでしょう。実践理性批判はTの字の横にまっすぐ伸びるラインであり、苦しんで植えた木の枝ともいえると思います。しかしカントがほんとうにめざしたゴールはこの木のはるか上方に咲く花である判断力批判でした。

苦しみの土台からの飛躍2

苦しみの記憶が痛ければ痛いほど、それをのりこえて生きる今を尊く感じる・・・そう思うので、私は、少し普通とは違うかもしれませんが、苦しみの記憶を思い出させる物を大事にするようにします。私は自分が今までで最もがんばってのりこえた苦しい記憶とともにある物に、「躓きの石」という名前をつけてみました。そして思ったのです。カントにとっては、この私の「躓きの石」と同じ意味の宝が「純粋理性批判」であったのではないかと・・・。カントの純粋理性批判は完成までに十数年かかったといわれます。カントは躓きの石という障害に立ち向かうために批判哲学を始めたと思うのですが、私のイメージでは、カントはこの、苦しみの石を軸にすえて、この石にすべてを吸収させるかのようなイメージで純粋理性批判を書いたと思うのです。きっと最初はこの苦しみの石は、グラグラとゆれていたことでしょう。それが苦しみが人におとずれたときの状態です。しかしそのときが、人間の最も尊い力が呼び起されるチャンスです。心の苦しみをしっかり見据えてそれに向き合う覚悟を決めたとき、そこから哲学がはじまっていく・・・心が苦しんでグラグラするのをしっかりとどめようとする力こそ、哲学という永遠の塔を建てる、人間の最も大きな力だと思うのです。

純粋理性がTの字の縦のラインだとさきほど書きましたが、その苦しみは上昇する苦しみで、交点の躓きの石は苦しみを吸収するからこそ上へ伸びることができ、躓きの石は苦しみを吸収することによって、さらに上昇する木の種になるのではないかと思います。その木がいつしか成長し、神の世界の花をさかせる・・・それが判断力の花です。

人間の根本的な苦しみである躓きの石は、苦しみではありますが、大切にすることで、カントの最後の批判書「判断力批判」の花となった・・・きっとカントだけではなく、真剣に生きる人全てに、神の美しさの花が咲くと思うのです。

苦しいことがおきるたびにそれを見ないようにしてふたをして生きていくことは、たやすいことかもしれません。しかしそれは苦しみの沼からのがれる生き方ではなく、その沼を浮き輪で泳ぐようなことです。決して苦しみはなく、本人は幸せと思っているかもしれません。しかしその人は自分だけの人生の芸術の花を咲かせることはできないのです。

人間は生きているかぎりTの字の横のラインの道徳的自由にいくのは難しいものです。しかし、なんとか幸せに生きようともがき、いつか気がつくでしょう。そのもがいている苦しみこそが、人生の花をそだてる種になると・・・。苦しみに向き合うことこそこの世で幸せを見つけるための糧なのですから・・・。

先ほど同じことを判断力批判のイメージで行いましたが、実践理性批判についても詩的な文章で表してみます。

私は星がほしい。この手の中に。無理ならば星に匹敵する宝がほしい・・・。

星は苦しいとき涙目で見上げると何倍も美しくにじむ。そして泣いたあともう一度立ち上がろうと思って見るともっときれいだ。

どうして手にとどかないものを人は求め続けるのだろうか。

私は大切なものをなにひとつ得ることができないまま、大人になりかけていた。本当にほしいものは一生手にはいらぬのだと思っている中、一冊の本を買った。「実践理性批判」というカントの道德書だった。

その本は確かな手ごたえがあった。私は書き記すということの中で大切なもの、ほしいものをつかむことができることに気がついた。そしてその本の結びのことばを読み、私は泣いた。

「ここに二つの物がある。それは我々がその物を思念すること長くかつしばしばなるにつれて、常にいや増す新たな感嘆と畏敬の念とをもって我々の心を余すところなく充足する、すなわち私の上なる星をちりばめた空と私のうちなる道德法則である。」

カントはこの二つをただ単に推測するだけではなく、私たちの意識にそのままじかに連結することができるを書いていた。

この人は星をつかんでいることが心からわかった。

私にとっての星は芸術です。それは私が哲学をしながらずっと詩や音楽にあこがれ続けているからでしょう。カントにとっての星は道德哲学だったのかもしれませんが。人は苦しみの地に立ちながらずっと手にとどかないものを求め続ける・・・しかし届かないものを心の中でとらえることができることを、私はこの本を読んで知りました。届かないと思っているものは自分が一生取り組もうと決めた分野の中で何かをやりとげたと思えたときに確かに手の中に存在するのです。

人は何のために苦しみの地にいるのか・・・すべては苦しみを縦に積み重ねることによってあこがれているものへ手をのばすためだと思うのです。カントは純粋理性批判を書きながらも、書いたあとも苦しかったかもしれない。しかしその苦しみのあと実践理性批判で、星の中に心をつなげることができている。私はこの魔法のような現象をみて、私も哲学者になりたいと思ったのです。

大切なものを形にするとはどういうことなのでしょう。本当に大切なものは、花や星など、しっかりと手にできないものだと思うのです。人はひとつの分野をつきつめながら、花や星などの天上の美にむかい、そこまでの道筋をかたちにするのだと思うのです。私はカントが純粋理性批判で天上の美へむかうためのあしがかりを作り、実践理性批判で上る道のもっともしっかりした段で星をながめ、判断力批判で美を形にすることに成功したように感じるのです。

アダムとイブ

「アダムとイブ」の物語を皆さんご存知でしょうか。聖書の創世記に出てくる、エデンの園に住んでいた二人が、蛇に唆されて禁断の木の実を食べたために神の国を追放されたお話です。キリスト教の「原罪」の考えを表しています。

どうして私たちはこの世に生まれて、苦しみの中何かをつきつめていけないのでしょうか。地上が苦しいわけは、地上が物の世界だからです。地上は天上のように美しい力が満ちていることはなく、何も力をもたないと思われる物質にかこまれて暮らさなければなりません。しかし、物質の中で必死にもがいているうちに自分だけの花の種をみつけることができるのです。その種は、自分が心すくわれて、やりたいこと、生きがいをみつけたときにまいているはずです。その種は、味気ない物たちの中から光を見つけようとして必死にならなければ見つからず、天上の世界のように手をのばせばあたえられるような幸せな世界では逆に見つからないものなのです。それは物の中にもまれて、何も確かなものがないと絶望しなければみつからない宝なのです。そしてこの宝こそ、地上に植えて天上の美の花に届く木の種であり、星にむかってはしごをかけることのできるあしがかりなのです。最初から天国にいては、自分ではなにも苦労せず、恩恵だけ受けて暮らすことになるかもしれず、アダムとイブが地上におりたことは罰なのではないと私には思えるのです。この種は、自分だけの生きがいを生み、天上の美しさに心をまっすぐに向かわせて、そこまでの道を切り開きます。苦しみの沼にまかなければならないので苦しみはずっとついてくるのですが、この種の成長は苦しみに意味を持たせ、苦しみを分解して伸びていくのです。この、伸びていく道筋をかたちとして表す喜びが途方もなく大きなものなので、きっと生まれてきてよかったと思えるはずです。

物質と精神についてデカルトは物心二元論を展開していますが、カントにとっても物質界の中の感性の世界から始まり、上昇していく純粋理性の世界と叡智界である実践理性の世界は容易にまとめることができないものだったと思われます。私はこれまで人としての美へのアプローチを、「花を咲かせるための木を育てる」そして「星空へのはしごをかける」という二通りの表現で書きましたが、花も星もしっかりと手でつかむことはできません。だからこそ人はそれを手にしようとしてずっと努力を続けることができるのでしょうか。カントの、純粋理性から実践理性へのアプローチは、物と心を、デカルトのように二つに分けて考えるのではなく、物の世界から、より美しい観念の世界である花や星にむかって人がいかに近づいていけるかという試みであるような気がします。私は花や星をダイヤモンドのように手でしっかりとぎればどんなに人は満たされるであろうとよく考えてしまうのですが、もし美というものを人が手でにぎってしまえば、そこで人の叡智界へのアプローチが終わってしまうような気がします。届かない、手でにぎれないものを追いかけるからこそ人は素晴らしい向上を続けられるのではないのでしょうか。

悟りをひらくとは？

人は何かをなしとげたあと、その栄光で生きていく道と、なしとげたものを通過点としてさらに努力を続けていくかのわかれ道にあります。苦しみの中探して植えた種が木をつくり、それを苦心して育てたのち花を開かせたのなら、その花を胸に飾って生きてもいいのかもしれませんが。しかしあらゆる分野が神の叡智界の美しさへのアプローチなら、限界までたどりつくということがはたして人に可能でしょうか。もし努力を重ね続けて生きることがあまりにつらく苦しいのなら、最初から何かを築こうとせず、楽しいことだけをかきあつめて人生の荒れ地に雪をふらせてそれを踏みしめる喜びの中生きることも可能です。それなのにどうして人は何かに打ち込んで苦しい努力を続けるのでしょうか。カントも批判書を完成したあとも、決して哲学をやめようとしませんでした。何かに打ち込むことは、どろどろの沼にしっかりした土台を作って建物をたてることです。沼の中に木を植えること、荒れ地にはしごをかけて星に手をのばすことです。カントの哲学と照らし合わせれば、苦しい感性世界から始まる純粋理性から、神の叡智界の実践理性へと伸びていく試みです。

キリスト様やお釈迦様は生きているうちに叡智界へのぼって悟りをひらいて神になったのかもしれませんが。しかし哲学者は神になるアプローチを続けなければならず、はっきりした悟りをひらくことはないかもしれません。なぜならこの世界は物質界の苦しみの中で叡智界をめざすものであり、物質界にて苦の中何かを築いて叡智界に近づきたいという哲学者の欲望を捨ててしまっただけでは、上昇がストップするからです。

悟りをひらくとは？2

苦しみの物質界と天上の美の叡智界 この二つを統一することはどんな哲学者にとっても難しいことだと思います。このふたつの間にある躓きの石がダイヤのように輝くとき、それがなされるのでしょうか。苦しみが美しいものにかわるときが悟りをひらいたときと言えるのかもしれませんが。しかし完全な道徳性を手に入れ、安全なところにのれば、人は何かを築いて苦しみの沼からはいあがろうとしなくなってしまいます。カントは晩年、遺作「オプス・ポストウムム」で二元論をまとめようとしたようですが、かなり苦心した末、その作品は未完のままカントは天に召されました。彼はその作品で批判哲学が完成すると言っていました。しかし私はカントに完全な哲学を書きおえ、平坦な道にのるよりもむしろ、二元論のはざまですっと哲学を続けてほしいと願ってしまうのです。カントの哲学のはじまりは、純粹理性批判において、神の叡智界へのぼろうとすると理性に「アンチノミー」という矛盾が生じてしまうという困難からでした。彼が「批判」というタイトルを著書につけたことは、哲学が物事を全て解決し、完全な悟りを得るための学問なのではなく、矛盾に向き合うことそのものを目的とする学問であることを示しているからのように思われるのです。カントの有名な言葉に「哲学を学ぶのではなく哲学することを学ぶ」というのがあります。哲学は矛盾にむきあって自分なりに哲学する学問であり、完成された悟りへの道を学ぶ学問ではないからカントはこのように言ったのでしょうか。カントは「物自体」という言葉で天上の叡智界を示し、そこにある全ての真の姿は生きているうちにはとらえられないと言っています。しかし生きている世界の中に生あるものにしか味わえない美しい木の種があります。アダムとイブはこの種を見つけるには地上に生きるしかないのです。地上におろされたとは思いますが。その種は苦しみの中にかくされているのではないかと思います。つまり物の世界の中にしかないのです。苦しい気持ちは、物の世界で生きなければならないむなしさからおとずれます。しかしそのむなしさの中から必死になにか確かなものを見つけよう、信じようともがいて種を見つける必要があるのです。その種は栗のようにトゲの中にあるのです。カントの純粹理性批判も、躓きの石という哲学の十字架の真の意味を探ることからはじまったのです。この種から神の叡智界に伸びる一本の木で、天と地の二元論を表し、二つを統一したいという欲求が彼に晩年まで哲学にむかわせたのではないのでしょうか。

悟りをひらくとは？3

物質の中の世界の苦しみと天上の美の世界は二元論であり、統一できないものかもしれません。しかしこの二つが一本の木の姿であるにとらえれば、苦しみがいつか花ひらくことがわかり、生まれてきた意味もわかるはずです。だから哲学者は二元論をまとめるという課題にとりくみつづけるのです。物と心の間をうろうろすることで人はいろいろなものをつむぎだすのかもしれませんが。そして物も心もどちらを選んでもならず、大切なのは心をこめて物をあつかうことなのかもしれません。なぜなら心だけを大切にしても抽象的なものにとらえられないストレスがたまっていくし、物だけがいくらたくさんあってもむなしだけだからです。きっとこの世界でのいちばん有意義な過ごし方は人や物を心から大切にしていくことなのでしょう。哲学をしていなくても人は二元論をまとめようとしているのです。しかしカントは観念哲学者です。もちろん物質よりも精神を重んじています。それはきっと彼岸の世界ではたやすいことだと思います。カントが考えている叡智界ではきっと美しい精神ははっきり形としてあらわれると思われるからです。カントはその世界を「物自体」という表現で表しています。しかしこの世ではどう考えても物が精神の輝きをもっているとは考えられません。これがこの世に生きるむなしさの原因です。物と心はこの世ではばらばらであるかのように思われるのです。では何かにすがらないと立ってられないときどうすればいいのでしょうか。きっとそういうときこそ、苦しみの沼の中に確かな種をまく時なのです。まず身近な物を大切に考えて下さい。自分のまわりにある物、そして自分を思ってくれる人は、自分が大切に思うことで、人生の困難を切り開く大きなカギとなりえるのです。この世のものは全て形にすぎないと思うことは正しいのかもしれませんが。しかしそれこそが仮象です。神はこの世という物の世界の中に信じられるものをさがす旅に、私たちを送り出したのです。きっと苦しみの中でこそ、もっとも確かな花の種を見つけられます。その種を見つけてしまえば、あとは苦しみの沼にまけばいいだけです。その種は沼のよどみを美しくしっかりした大地にかえてくれるでしょう。これが人生における一つの悟りといえるかもしれません。お釈迦様もキリストさまもこの悟りをえる前に人生の苦しみをあえて自分に課しておられたのです。

この世が物の世界であるからこそ、心という目に見えないものの大切さに気づくことが難しく、ほとんどの人が物質的なものにしがみついで生きています。生きることが苦しく、むなしければますます、わかりやすい形にしがみついで安心しようとしてしまうでしょう。自分が極めたい道をもっている人でさえ、自分の業績を目にみえる形につくって、その栄光で生きようとするのは自然なことかもしれません。それは、生きることが苦しいからであって、誰もがそうしてしまうのです。しかし、それは神の精神からとてもはなれたことです。神が私たち人間にのぞんでいることは、かぎりなく努力をつづけ、尊い人になって永遠の生に近づくことです。そのためにあえて人間は、むなしさとむきあい、苦しみを経験し、はいあがろうとしなければならず、何かにしがみついで安心している場合ではないのです。私もそのことを理屈ではわかりつつも、やはり何かにしがみついくことばかり考えていました。しかし努力しても私の手には何もつかめません。たとえつかめたとしても、やはり私は苦しみつづけて生きることがわかっており、疲れ果てていました。そんなとき、いつも支えてくれる友人が、「悟り」というものについて、たくさんヒントをくれたのです。悟りは神様にしかなく、人間は苦しみつづけなくてはならないのではないのかと思って私が疲れ果てていたときでした。友人は、生きることの苦を、もがき苦しむものではなく美しいものにすることができるようになることが悟りだと教えてくれました。それを聞いて、私は一人一人に悟りの形があると思い、私にとっての悟りを真剣に考えてみました。そして、私にとっては、愛と優しさのように思いました。私は地上が苦しく、自分やまわりの物がいやでたまらず、そこからのがれようとして哲学をしたり書いたりしており、だんだん乱雑になってくる部屋がいやで、ますます上昇しようとして書き続け、さらにまわりがきたなくなる・・・という悪循環がありました。私を受け入れてくれない人々のことも、「たくさんの冷たい人々」とひとくくりにしていて、書いたものを出版する気持ちはなく、哲学や書くことは私一人の自己満足でした。しかしその友人との会話で私は地上からのがれようとしてばかりいたことに気づけたのです。私は地上を愛そうと思いました。もし書いたものを出版することで何かを人につたえられれば・・・そして私自身もこの地上を愛せるようになればと思いました。それは、神が地上を愛してこの自然をつくってくれたことに少しでも近づくことだと気づいた私は、地の苦しみにもがくことから少し解放されました。地を愛することで安らかになる・・・これが私にとって、苦しみの種の次のもう一つの悟りかもしれないのです。

しかし、人間である以上、ときには自分がいやでどうしようもなくなることもあるかもしれません。地上の世界がいやで地から上へとのがれていこうとするのはずっと続き、地を大きくつつみこみ、愛することはよっぽど心が広くないとできないのかもしれませんが。私は自分が悟りを得て、心穏やかになりたい気持ちとむきあい、大きな一本の木を心の中に思いえがきました。私は木のように、美しい神の光と愛の中に伸び、苦しい地上をはなれたい。私が哲学をするのはそのためかもしれません。そして自分がカントの哲学とであった時のことを思いだしました。私はカントの哲学を学び、苦しみの沼に立つ一本の木のようにだと思いました。カントは理性の大切さをとらえるために、あえて理性を批判しました。それは批判的に見ることでかえって理性の土台

がしっかりするからだと思います。そして、どうして天をめざす批判哲学の木は「批判する」というグラグラの土台の上に、あえて立てないといけないのか考えてみました。私はそのことを考えて、カントの立てた理性の木は苦しみからのがれて神の愛という答えを出して心穏やかになることができたのかどうか知りたかったのです。カントは愛については哲学していません。しかし私がたどりついたひとつの悟りである神の愛は哲学者がめざすものなののでしょうか。

神の目線2

カントは道徳書である実践理性批判においても「批判」を軸に哲学しています。カントがこの著書において批判しているのは「自愛」です。自愛も批判すべきグラグラの土台です。このグラグラは大切なカギではないでしょうか。自愛が生じるのも理性が不確かなのもこの世が物質界だからです。自分の体が全て想念でできていれば、自分のどこが汚れているのかははっきりわかり、汚いところは直そうと努力できます。そしてよりよい自分になれば自然と自分を好きになれるし、ゆがんだ自愛などはありません。理性の不確かさもこの世だけのものです。なぜなら彼岸の世界で神の光までもが見渡せれば、理性で認識できるものに限界はなく、批判する必要もありません。しかしカントの哲学は批判することから始まります。苦しみがなければ上へと伸びていくとはせず、哲学も成立しないかもしれないのです。そう考えれば、「批判」と、私がつねに苦しんでいる「グラグラの地上」はどうしても必要であるのではないのでしょうか。人間は哲学や、人生について勉強するためにこの世に生まれた。そして苦しみのない世界を自分で構築しようとする。そして立てていく一本の木はやはりグラグラの地を批判することが原動力であり、苦しみから始まり、いつまでも神の愛と光を木のように求めつづけるのが人生であり、カントも究極的には全てを統一する神の愛や光のようなものをめざしていたのではないかと思えるのです。私はカントの哲学が木であると思うがゆえにそう考えずにはられません。カントはたいへん慎重なのできっと神や愛などという究極的な答えを明言しなかったのです。

私は悟りには二段階あるのではないかと思います。一つ目は、苦しみの地上でやるべきことを見つけたとき。そしてもう一つは自分の進む道が木のように美しく伸びて花を咲かせ、今までの苦しみの意味がわかった時。苦しみの意味がわかったとき、苦しみは必ず分解されるのです。私は哲学の木をつらぬくものが何かをずっと考えていました。それはきっと愛なのです。哲学は、知を愛する学問なのです。哲学とはこの世を愛そうと努力して、いつしか苦しみをつつむことを目標とする学問ではないでしょうか。しかし愛を哲学することは可能でしょうか。そのことについて考えてみるとたとえばカバンの中の物をきれいに整えるとき、本当にきっちりさせることは、物を大切に、いとしいと思うことです。物がどうでもいいと考えるより、大切に思うほうがずっときれいになります。そして、失った物が見つかるのも、めちゃくちゃにちらかしながらさがすときよりも、心をおちつけてしっかり考えながら秩序を守りつつさがすほうが効率的です。人は心の中に、その人だけの秩序の法廷をもっていて、それに従って物をあつかいながらくらしています。たとえ人に誇れる道や仕事をもっていなくても、物の中でていねいに生きることこそが自分の法廷で秩序を学ぶことなのです。カントが理想の世界と考えた「目的の国」とは、自立した個人が正しい道德の秩序を守って生きる国でした。カントは法でがんじがらめになってしまうことを避けているかのような印象をうけます。それはきっと個人の内面の法廷の美しさを信じたからなのでしょう。私はあるとき町で、かじったあとのあるリンゴのブローチを見つけました。私はそのブローチを欲しいと思いましたが買いませんでした。アダムとイブの話を読みだしてなんとなく避けたのです。その時私は苦しみの地上がいやでしかたなかったのです。地上にいることはアダムとイブが禁断の実を食べたのと同じで、私への罰なのだと思っていました。しかし、あとでやっぱり買えばよかったと後悔しました。地上が罰ならその苦をまずしっかりと受けとめないと何も始まらないのだと気づいたのです。その苦を私はブローチで表したかった。私はそのとき、まず苦しみから自分の生きる道が伸びていることに気がつきました。それが私の第一の悟りでした。私はそのあと苦しみと戦いながら、考えるということをしていきました。お金にはなりません、それを私の本当の仕事と思っていました。人はまず、苦しみの中からはいあがるために一つの道を見つけます。それが一つ目の悟りです。そしてある程度その道を進むと、心が満たされていき、あのとき苦しかったのはこの道を進んで大きな人生の収穫を得るためだったと気が付くのです。それが第二の悟りであり、そのとき苦しみの源はくだかれています。私は最初からそのことが心の奥底でわかっている、ブローチを買わなかったような気がするのです。私はまわりのものを愛するということ、物の世界の中でずっとしていきました。買わなかったブローチの分も、物を大切にしました。そして、物から、秩序の美しさを学びました。哲学という分野は、精神の世界の学問ですが、私は物の世界にいないければ哲学できなかったかもしれません。物と精神の二元論の原点をそのブローチが示しました。物を愛することは秩序の源泉であるのかもしれない。

人は痛みの源に気づかなければひとつの道を進んでいくことができません。ひとつの道が伸びていくもとである第一の悟りである苦しみの種は、痛かった出来事の中から見つけるのです。私はリンゴのブローチを心がどろどろの時にみつけました。だからそれはいっそう輝いてみえました。苦しいときほど、最も大切な物を見つけるチャンスなのです。私はそれを買いませんでしたが心の中で大切な物をつかんでいました。それは何か大切な物を軸にして、そこから種が発芽するように道が伸びていくことです。何かを大切に思うという軸をもっていれば、必ず人生が輝くのです！！そのためには悲しく、苦しい思いをくぐりぬげなければなりません。栗の実のように、大切なものは痛みの中にあるからです。悲しいとき、つらいときは、自分の心につきたてられている痛みのナイフから目をそらすのではなく、自分が悲しくつらいということをみとめて、その原因であるナイフをそっとやさしいハンカチでつつんでください。おだやかな、リラックスした気持ちをひっぱりだして、自分の痛みの原因をつつもうとします。そうすると、痛みのナイフはハンカチの中でこれから道を切り開いていく強い味方に変身するのです。悲しみの中で見つけた大きな武器は、悲しかった分だけ強く、押し上げてくれるはずです。大切な人を不慮の事故で亡くした方は、その悲しみの分、同じ事故がおきてまた悲しむ人が二度と現れないように尽力するための道を歩んだりされます。

神の目線5

私の場合、何も大切にせず、すべてがばらばらのジグソーパズルのようだった状態から、リンゴのブローチが救ってくれました。私は何かを大切に生きようと思いました。そして私が始めたのは勉強でした。私は知識というものが何かを軸に組み立てられるのが見たくなくなったのです。不思議なことに自分の道が少しつかめてからの日々はばらばらのジグソーパズルがぴたぴたとハマっていくような感じがしました。「むなしい」と感じるものがなくなったのです。どんなつらいことに直面してもそのことは自分を上昇させてくれる糧になります。なんというか、天に伸びていく道の途上にいる感じがするのです。この世は美しいと初めて思いました。勉強するということで伸びていく一本の道はあらゆる出来事を引力のようなものでひきつけて天へ伸びる美しいパズルを構成していきます。私の、身のまわりにも、少しですが変化がありました。私はいつもまわりをきれいにしているのではないのですが、不思議な引力は物にも働き、自分が勉強をすすめるやうに物をととのえることが少しできるようになりました。自分がやるべきことを見つける第一の悟りはすばらしいものでした！！しかし勉強する中で私は心がもっと上へもっと上へいつもあせっているように感じていました。ひとつの道を見つけても苦しみはやはり追いかけてくるのです。この苦しみについて解いている書籍はないものかと考えているときに、私はカントの哲学と出会ったのです。カントは「哲学を学ぶのではなく哲学することを学ぶ」と言っています。人はいつも何かを追い求めている。お買い物が好き人はきつといつも何か素敵な物をさがし続けているのでしょう。しかし私は勉強するという道を見つけても、自分が何を追い求めているのかははっきりしなかったのです。その答えをカントの言葉が示していました。幸せの青い鳥が哲学だとすると、それをつかまえる（哲学を学ぶ）のではなく、どうやって追い求めるかという過程そのもの（哲学することを学ぶ）が問題なのです。道を究めても苦しみの意味をつかめる第二の悟りに、生きているうちは到達しないかもしれない。しかし、カントは実践理性批判で書いている、道徳的な理想の国「目的の国」を、キリスト教の「神の国」と同じように、具体的な意味では言っていないのかもしれない。この世でたくさん学び、理想を追い求め、その過程の階段の踊り場で一息つき、苦しかった階段を「ここまでのぼったな」と思いねぎらう一瞬が幸せであれば、その一息を第二の悟りといっているのではないか・・・本当の楽園に行ってハッピーエンドなんて、つまらないではないか・・・努力し続ける過程の大切さをカントが教えてくれたから私はそう思えたのです。

人は本当に苦しいとき、何かにすがろうとします。この世というたくさんの物の世界に生まれた以上、必ずむなしさ、苦しきにおそわれます。心がどろどろになっては、まわりの全ての物も憎らしく思えたりするでしょう。私はそんな時にきらっとそれだけ光って見える物を見つけました。それがリンゴのブローチでした。買いもとめはしませんでした。私はそれを見ただけで、この世に生まれた意味を見つけました。宝物は、栗の実のように、この世という痛みの中にあり、それを手にするために人は生まれてくるのだと思ったのです。私はカントにとってのこの世の宝、軸はなんであったのだろうか考えてみてはっとしました。カントは十年あまりかけて最初の批判書の純粋理性批判を書きました。そして道徳的な自由へと伸びていくのをはばむ、哲学の課題である躓きの石に気がつきました。私は躓きの石は、種だったのだと思いました。その種は苦しみの地上にまかれ、実践理性の自由をめざしながら成長し、天上の花をさかせたのです。苦しみのほざまにこそ、美の世界があったのです。それこそが、この世界でカントが探り続けたものなのでしょう。カントは苦しみの中に存在するこの石を大切に思っていたのです。まちががなくその課題があるからこそカントは問題解決の必要にせまられて生涯、哲学にとりくんだのだから……。私はリンゴのブローチを買わなかった。それは、人生で大切なことを悟ってからもなお、そこから苦しみの道が伸びていることをなんとなくわかったからでした。しかしそのブローチを見てアダムとイブの禁断の実を思いだし、地上の苦しみの意味に思いをいたしたことが私の道のスタート地点でした。それはカントが躓きの石を哲学の十字架として受け止めながらもそれを心で大切にそれを基軸に哲学をしたことと、とても似ているように思えるのです。それではカントはその苦しみの石をダイヤのようなキラキラした宝にかえられたのでしょうか？私はそれを知りたくてカントの三つ目の批判書、判断力批判を読みました。すると、驚くべきことに、純粋理性の自然的欲求から実践理性の道徳的自由へと上昇するのをはばむ躓きの石の位置に、判断力があるのです。（躓きの石は「自由」の意味を持ちますが、厳密には判断力は「自由」ではなく、自然と自由の間のもので。私のおおざっぱな解釈ですみません。）

判断力とは、心に降りてくる美しい感情であり、芸術や自然の美に感動する心のことを指していました。それを「快・不快の感情」と書いてありましたが、そこには純粋理性の苦しきも、実践理性の道徳の難しさもなく、とても自然であり、しかも神の世界の摂理を感じとることができます。カントは自然の素晴らしさを美しい表現で書いていました。私は躓きの石は、リンゴの種だったのだと思いました。その種は苦しみの地上にまかれ、実践理性の自由をめざしながら成長し、判断力批判として天上の花をさかせたのです。苦しみのほざまにこそ、美の世界があったのです。それこそが、この世界でカントが探り続けたものなのでしょう。

参考文献

「カントはこう考えた」(ちくま学芸文庫 1998年)石川文康 著